



福島民友新聞創刊
130周年プレ記念事業

檜枝岐歌舞伎

福島公演

令和6年

5月18日 (土)

各回定員 450名

午前の部 開場 午前9時30分 開演 午前10時
午後の部 開場 午後1時30分 開演 午後2時

演目 / 義経千本桜 鳥居前の場

出演 / 千葉之家 花駒座

会場 / キョウワグループ・

テルサホール(福島市上町4-25)

入場券(全席自由) / 一般 3,000円
高校生以下 2,000円

主催: 福島民友新聞社

共催: 公益財団法人福島市振興公社

特別協賛: JA共済連福島 特別協力: NTT東日本福島支店

協力: 南会津郡檜枝岐村

後援: 福島県、読売新聞東京本社福島支局、NHK福島放送局、福島中央テレビ、福島テレビ、福島放送、テレビユー福島、ふくしまFM、朝日新聞福島総局、河北新報社(順不同)

チケット販売 福島民友新聞社営業局事業部、郡山総支社、いわき支社、若松支社(平日午前10時~午後5時)、キョウワグループ・テルサホール(午前9時~午後6時、5月13日は休館)

お問い合わせ

福島民友新聞社営業局事業部

TEL 024-523-1334 (平日午前10時~午後5時)

歳時記の郷
奥会津展in福島で
使える300円
お買い物券付き!

同時開催

歳時記の郷 奥会津展 in福島

同じ会場で、南郷トマトや奥会津金山赤カボチャを使った食品、木工アクセサリなどを販売します。時間は午前9時30分~午後4時30分。

お買い物券はNTTカードソリューションの「おまかせeマネー」を使用しています。



詳細はこちら

檜枝岐歌舞伎概要

約280年の歴史を持つ檜枝岐歌舞伎は、江戸時代後期に村人がお伊勢参りに行った折、上方や江戸で見聞きした歌舞伎を村の娯楽に取り入れたのが始まりと言われている。江戸時代には奥会津地方帯は数多くの農村舞台と歌舞伎二座があった。芝居は消費的だとして禁止または抑制された歴史があるが、奥会津地方は、藩の支配地ではなく「南山御蔵入領（みなみやまおくらいりりょう）」と呼ばれた幕府の直轄地で、比較的自由度が高かったことなどから地芝居が盛んであったとされている。

檜枝岐歌舞伎の特徴は、古典そのままの形が残っていること。他の地域では時代の変遷や役者の個性などで形を変えてきているのに対し、檜枝岐歌舞伎では親から子、子から孫へ型や振りを伝え、檜枝岐歌舞伎にしかない振りがしっかりと受け継がれている。

現在は檜枝岐歌舞伎の伝承団体「千葉之家花駒座」によって、檜枝岐歌舞伎が継承されている。花駒座は100年以上の歴史があり、村内での公演は国指定重要有形民俗文化財「檜枝岐の舞台」で行っている。花駒座は村民を中心に構成され「イチ口上、二眼、サン振り」を基本として長く檜枝岐歌舞伎を受け継いでおり、演者のほか、かつらを担当する「床山」や語り手である「竹本」も花駒座の座員が担っている。本日は、花駒座による歴史と伝統を受け継ぐ檜枝岐歌舞伎をとくとくご覧あれ。



壽式二番叟

能の演目である「翁」に由来。神聖な儀式として扱われ、「翁」は天下泰平・国土安穩を、「三番叟（さんばそう）」は五穀豊穡を祈る儀式で、通常、歌舞伎では正月歌舞伎や興行の初日などに行うとされている。檜枝岐村では、その日の舞台清めと公演の無事を祈るため、上演前に必ず演じることになっている。

舞台には、御神酒と枡（拍子木）を祭壇に飾り、舞台の四方（東西南北）を踏みしめながら軽快に舞う。この三番叟の出来がその日の歌舞伎の出来を左右すると言われ、清められた枡でその日の幕が開く。



主な登場人物

義経千本桜

鳥居前の場

あらすじ

◎源義経（みなもと の よしつね）
源平合戦で活躍するが、その後兄の源頼朝に追われる身となる。義経伝説を背景に、武勇に優れ一軍の将にふさわしく情理をわきまえた人物として描かれる。

◎武蔵坊弁慶（むさしぼうべんけい）
豪腕無双の荒法師。義経の家来。

◎静御前（しずかごぜん）
義経の愛妾。義経に、千年の時を経た雄狐・雌狐の皮を張った「初音の鼓」を託される。

◎佐藤四郎兵衛忠信（さとうしろうべいただのぶ）
義経の重臣だが、歌舞伎に登場する忠信は狐の化身（狐忠信）である。この狐は、自分の親狐の皮で作られている「初音の鼓」を常に寄り添い守り、親への孝行を尽くす。

◎亀井六郎・駿河次郎（かめいろうじろうすけじろう）
二人とも義経の家臣である。義経の旅に同行していく。

◎逸見の藤太（はやみのとうた）
土佐坊正尊の家来で、義経の後を追って来るが、狐忠信の手にかかり殺される。



義経が兄・頼朝との不和で都を落ち、大物ケ浦へ向かう途中の物語。武蔵坊弁慶は、義経を討つために追ってきた頼朝の家来を殺してしまうが、頼朝に逆らう事が本意ではない義経の叱りを受ける。しかし、義経を慕って後を追ってきた静御前のとりなしによって二人の心も和らぐ。静御前は、どうしても義経と一緒に行きたいと頼むが聞き入れられず、ついに静御前は縛られ、初音の鼓を添えて行はその場を立ち去る。

その後、追っ手が現れ、静御前と鼓を奪おうとするが、そこへ義経の家来の佐藤忠信が駆けつけ、見事な動きで敵を追い散らす。この様子を物陰から見ている義経一行が再び現れ、忠信をたたえ、褒美の品と清和天皇の皇胤（こういん）源九郎義経（みなもと の くるう よしつね）の姓名を譲り「まさかの時には自分の身代わりになってくれ」と言い、静御前と鼓を佐藤忠信に託して別れた。

歌舞伎での佐藤忠信は実は狐の化身として描かれる。狐忠信とも言われ、狐六法という歩き方なども見られる。また、静御前に渡された鼓は「初音の鼓」といい、鼓の皮は忠信の親狐の皮で作られているため、狐忠信はこの鼓のあるところを常について歩いたと言われる。

最後には、忠信が鼓を恋しそうにする場面も見られ、短い幕ではあるが、檜枝岐ならではの歌舞伎を見ることが出来る演目となっている。